シリーズ　松陰先生に学ぶ

松陰先生と私

防府市教員委員会生涯学習課
人権学習指導員　水野　昭

松陰先生との出会いは、今から三十年以上も前にさかのぼる。当時、防府市立中関小学校に勤務していた私は、元中関小学校長　小川善博先生から防府松陰研究会への入会を勧められ加入した。月に一～二回程度の輪読会が行われていた。当時の講師は、故河村太市先生。先生の博識と人生観に触れ、魂が揺り動かされたのを覚えている。

平成二年度、山口県教育会からの委託を受け、『松陰先生に学ぶ』編集の機会を得た。その時の委員長は、現在、松風会の理事長をされている室謙司先生、委員は九名、この十名で、十章を分担し執筆していった。私の担当は、「四　純粋な人　松陰」。今回、寄稿の機会を得、この章を読み直してみた。

以下、本文からの引用。脱藩の罪により、杉家に預けられていた松陰は、藩主の計らいで、嘉永六年（一八五三年）一月二十六日の早朝、十カ年の諸国遊学の旅に出ました。二月十日、大阪に着いて、近畿地方を遍歴し、多くの学者や志士を訪問しました。中でも、大和五条の森田節齊は、松陰の人物を見込んで、兵学などやめて、漢文学をやるようにと勧めました。松陰は、文学的な面にも非常に素質のある人で、やればできる人でしたから、文学を修めるのに精力を注ごうか、あるいは文学をやめてもっぱら兵学を学ぼうかとだいぶ迷ったようです。しかし、断然一決して「江戸に向かい、兵学を修めよう。」と中仙道を通って江戸に入りました。十一歳のとき、藩主の前で兵学の講義をみごとにやり遂げ、将来を期待されていた松陰だけに兵学を捨てることはできませんでした。それは、松陰だけのためではなく、藩主を裏切ってはならないと心の奥で叫ぶものがあったからです。（引用終わり）

私はこの一文を読み返し、もしも、松陰先生が漢文学の道に進んでおられたなら、また、松陰先生の人生は変わったものになっていたかもしれないと思いました。純粋さと誠実さ。不易の部分として、大切にしていきたい人の特性である。

吉田松陰の愛弟子　増野徳民

「増野徳民」は、天保十二年（一八四一）十一月二十一日、山代本郷村今市（現、本郷町）の医師「増野寛道」の長男として生まれる。
名は、後のちに晋藩、字は「徳民」または「無咎」といった。
増野家は、山代三老（三司）に連なる家系の一人である。

青雲の志に燃える十五歳の徳民は、安政三年（一八五六）十月、萩、松本村の藩士杉百合助の家に寄宿し、「松陰」に師事する。（杉家は、山代の代官杉民治、吉田松陰兄弟の実家である。）「松下村塾」に入った徳民は、人一倍の努力家で松陰は期待して「無咎」の字をあたえる。
吉田榮太郎（無逸）、松浦松洞（無窮）と共に三無生の一人として松下村塾の基礎を築いた。安政四年には、高杉晋作らも入門している。寄宿生の徳民は、毎朝、松陰の髪を結い、身の回りの世話をし、最も身近で最も長く松陰の教えを受けた一人である。
松陰入獄後は、藩医岡田以伯に学びつつ、松陰の命を受けて、品川弥次郎らと奔走する。安政六年五月、安政の大獄に連座した松陰は、江戸に送られることとなる。師を見送った徳民に、松陰は「国を治療するような医者になれ」と励ました。
松陰刑死後も、徳民はその志を継ぎ、同志久坂玄瑞らと共に、藩論を公武合体から尊皇攘夷に転換させた。しかし、そうした過激な言動がたたり、徳民（二十二歳）は文久二年（一八六二）三月五日、藩の役人に捕らえられ、萩の獄の身となり山代本郷に送還され、萩における七年間の活動もここに終えることとなる。
慶応二年（一八六六）六月に始まった、四境の役（第二次長州征伐）に総動員された山代の医師二十名の中に、山代勘場医、増野寛道（父）増野晋齋（徳民）の名前がある。明治二年六月「寅年芸州口戦争之砲銃創人治療・・・」を賞され、金十両を下賜されている。
時局は、動乱をきわめる中、かつての同志達の活躍や死を聞くたびに、徳民の心は痛み、決して楽しまなかったという。明治十年（一八七七）五月二十日、徳民は、多くの果たせぬ志を残したまま、妻むら、長男榮熊に看取られ三十七歳の若さで病没する。（墓は本郷町建立寺）

平成二十八年十一月吉日
本郷地域ささえ愛協議会
ふるさとの歴史講座

松陰先生の愛弟子　増野徳民

山代本郷歴史研究会　会長　池田　良幸

誕生地　増野徳民は、天保十二年（一八四一）山代本郷村（現岩国市本郷町）の萩毛利藩山代勘場医、増野寛道の長男として生まれる。名は乾のちに晋（徳民、字は徳民または無咎といった。また、山代三老に連なる家系の一人である。

杉家と山代本郷の縁　青雲の志に燃える十五歳の徳民は、安政三年（一八五六）萩、松本村の藩士杉百合助の家に寄宿し、松陰先生に師事する。（杉家は、山代本郷の代官杉民治宅、松陰の実家で松陰と同居）（玉木文之進も本郷勘場の代官を勤めている）松下村塾に入った徳民は、人一倍の努力家で松陰は期待して無咎の字をあたえる。吉田榮太郎（無逸）、松浦松洞（無窮）と共に三無生の一人として松下村塾の基礎を築いた。寄宿生の徳民は、毎朝松陰の髪を結い身のまわりの世話をした。最も長く最も身近で松陰の教えを受けた一人である。

攘夷運動で活躍　松陰入獄後は、藩医岡田以伯に学びつつ、松陰の命を受けて品川弥二郎らと奔走する。安政の大獄に連座した松陰は、江戸に送られることとなる。師を見送る徳民に「国を治療するような医者になれ」と励ました。

故郷に送還される　松陰刑死後も、徳民はその志を継ぎ、同志久坂玄瑞らと共に、藩論を公武合体から尊皇攘夷に転換させた。しかし、そうした過激な言動がたたり、徳民（二十二歳）は文久二年（一八六二）藩の役人に捕らえられて山代本郷に送還され、厳しい監視下の身となり、萩における七年間の活動もここに終えることとなる。

四境戦争　慶応二年（一八六六）に始まった「四境の役」（第二次長州征討）に総動員された山代の医師二十名の中に、山代勘場医、増野寛道（父）増野晋齋（徳民）の名前がある。明治二年「寅年芸州口戦争之砲銃創人治療・・・」を賞され、藩主より金十両を下賜されている。

病没　時局は、動乱をきわめる中、かつての同志たちの死を聞くたびに、徳民の心は痛み、決して楽しまなかったという。明治十年（一八七七）徳民は多くの果たせぬ志を残したまま、三十七歳の若さで吐血し病没する。歴史にもしもはないだろうが、もし謹慎の身でなかったなら、もし肺の病でなかったなら、萩で京で、明治新政府で、松陰先生の遺志を継ぎ、同志と共に活躍出来たのに・・・